

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4092300088		
法人名	社会福祉法人 南八女福祉会		
事業所名	グループホーム春の山		
所在地	福岡県八女市上陽町北川内182番地1		
自己評価作成日	令和5年2月13日	評価結果確定日	令和5年3月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社アール・ツーエス		
所在地	福岡市南区井尻4-2-1	TEL:092-589-5680	HP:https://www.r2s.co.jp
訪問調査日	令和5年3月6日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】(Altキー+enterで改行出来ます)

グループホーム春の山では、毎朝のミーティングの中で、両ユニットの情報共有や、職員ひとりひとりの役割・目標を確認しあっている。確認しあうことで、忙しくても、個別のサービスが実施できたり、両ユニットで協力し合うことができたりと、充実した1日になるようにしている。各入居者の担当職員が、家族に、月1~3回電話報告することで、日頃の生活の様子や体調を知っていただき、意見等を聞くことができています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所周辺には日用品販売店、ガソリンスタンド、八女市上陽町の支所や社会福祉協議会等がある。また、周囲にはイチゴ畑があり山々に囲まれたのどかな場所に「グループホーム 春の山」は建っている。自然豊かであり、落ち着いた空間である。つい半年前までは、利用者に提供する食事は全て手作りで提供されており、一時期は食事の配達業者を利用していたが、最近になって、また手作りの料理の提供を検討する等、食事に関して力を入れている。また、看取り介護にも積極的に取り組んでおり、看取り介護実施後に職員に実施状況の振り返りをしている。また、看取り介護を実施して良かった点、改善点をしっかりとまとめて、次の看取り介護の実施の際に生かせるように努力している事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝、ミーティングで理念の唱和をしている。ひとりひとりのあるがままを受け止め、という部分は、入居者だけではなく、職員にもあてはまり、ひとりひとりの個性を大切に考えることができるようになっている。	両方のユニット内と事務所内に理念を掲示しており、いつでも見れるようにしている。職員の名札の裏側に理念を入れたり、毎朝のミーティング時にも唱和をするので、職員全員が覚えている。利用者に関わる時に支援方法に迷った時は、理念に立ち戻って関わるようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナウイルス流行により、交流がなくなった。今後の交流も、まだ検討できていない。運営推進会議の案内や会議録は民生委員や駐在所などにも配布を継続している。	新型コロナウイルスの影響で、地域との関りは極端に少なくなっている。「上陽校区福祉会」という集まりが地域の社会福祉協議会であり、秋に話し合いに参加をしている。コロナ禍以前はパネル展示をしたこともある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議にて、春の山で起きている事故の報告や、身体拘束をしない取り組みなどを報告している。報告は限定され、地域の人々に情報がいきわたる工夫は必要。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	感染症蔓延予防のために、資料を郵送し、回答票に記載していただく方法をとっている。回答票に記載された内容は、会議録にまとめ、こちらからの意見を記載し、再度郵送している。また、職員の定例会議で内容にふれている。	利用者や利用者家族、民生委員、社会福祉協議会職員、八女市役所職員、地域包括支援センター職員、近隣のガソリンスタンド職員等が構成員となっている。運営推進会議は書面で実施しており、運営推進会議後に会議録を送って意見を頂くようにしている。意見が出たことについては、参加者全員に回答をしている。	運営推進会議は書面開催ですが、利用者家族からの意見を書面もらい、頂いた意見について事業所として回答をして、家族の意向を聴くように努力されている。今後も継続してはどうだろうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃から連絡を密にとっていないが、運営推進会議の会議録は提出しており、事業所の実情は把握していただいていると思う。オープン当初は、本部に相談することが多かったが、現在は、市担当者に直接相談している。	運営推進会議の際に市町村職員が来たり、介護保険更新申請等の申請関係の際に市町村と連携を図っている。また、生活保護受給者が1名おり、ケースワーカーとやり取りをしたり、おむつの申請代行をしている。コロナウイルスの感染者等が出た場合は、市町村に報告をしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関は施錠せず開放している。運営推進会議と一体的に実施している、身体拘束適正化検討委員会は、施設内でおきていることを報告している。	現在は、身体拘束をしている利用者はいない。身体拘束適正化検討委員会は運営推進会議と一体的に開催をしているため、年6回開催している。利用者家族に対して、身体拘束しないで済むような事例を報告すると、利用者家族からの反応も多く、事業所としての取り組みを理解していただいている。	

R5.3自己・外部評価票(グループホーム春の山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待については勉強会を実施している。わかっているような基本的な事でも、毎年繰り返すことで意識できる。介助の仕方や声の掛け方など、全体又は個別に振り返る機会を設けている。		
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	事務所、玄関に資料を準備している。以前、市や地域包括支援センターなどに相談したこともあった。これまで成年後見制度を利用されている方もおられたため、とても勉強になった。	成年後見制度のパンフレットを事務所と玄関に常備しており、必要に応じて閲覧できるようにしている。実際に聞かれることはないが、聞かれても答えられるようにしている。今は成年後見制度を利用されている利用者はいない。内部研修を定期的実施している。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は、時間をとってわかりやすく説明している。入居決定後、入居までの打ち合わせをする時にも詳しく説明している。料金や加算などの変更なども全員に行っている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	月に2～3回、病院受診の報告を電話で行っているが、その時に、日ごろの様子なども伝えるようにしている。毎回ではないが、この電話の時に、家族の意見を聞くことができる。ケアプランを見直す際の意向は、入居者、家族に聞き取りをしており、入居者には聞き取り方を工夫している。	面会については、一時期、窓越し面会だけではなく玄関先で面会を実施したこともあった。玄関先の面会の実施によって、利用者や利用者家族の方も喜ばれていたが、すぐに感染者が多くなり、窓越し面会になった経緯がある。敷地内の段差で危険な箇所について意見が上がったことがあり対策を講じたことがある。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者は職員と1対1で話す時間を設けている。また、それ以外でもいつでも話しかけるような雰囲気を意識している。意見などは、代表者などから管理者に伝え、それぞれの意見について話し合いをすることもある。	年1回4月の辞令交付の際に、法人代表者と職員が1対1で面談をする機会がある。また、法人代表者が定期的に事業所を訪問して、利用者や職員とも話す機会を持っているため、その際に相談が出来るようにしている。職員が利用希望した重度の利用者の移乗介助のためにリフトを導入したこともある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、管理者や職員に日ごろから声をかけるように意識している。また、各ユニットにも行き、入居者や職員の様子を直接見て把握するよう努力している。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	年齢、性別などを理由に排除していない。20代から70代の職員が働いている。得意なこと、苦手なこと、体力的に難しいことなどを理解し、できることを積極的に伸ばしていけるように考えている。家庭環境や、持病なども理解し、必要時配慮している。	職員の出産や育児、家族の介護等で職員が少しでも働きやすい、勤務しやすいように勤務調整をして勤務が継続できるように配慮している。職員は20歳代から70歳代の職員が勤務しており、裁縫や飾りつけが得意な職員がいるため、職員の特技を生かしながら勤務が出来ている。飾りつけについては利用者と一緒に取り組むことも多い。	

R5.3自己・外部評価票(グループホーム春の山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	勉強会を計画している。現在ではあまり聞くことがない部落差別などもまだ残っているため、入居者が生きてこられた時代を知るよう努力している。	年1回、内部研修を実施しており、職員が輪番制で研修講師を担当している。利用者に対して不適切な言動があった場合は、ミーティングの際や、その場その場で注意を促したり、どのように声掛けをしたら良いかの指導をしている。利用者家族に対しては、玄関の呼びベルが鳴った場合には、極力お待たせしないようにしたり、お待たせする時はその旨を説明できるように職員教育している。	コロナ禍であり、外部講師を招聘するのは難しいだろうが、福岡県講師団講師あっせん事業の活用が出来るようであれば、より専門的な研修を受講できるようにしてはどうだろうか。
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員ひとりひとりの性格や得意なこと、苦手なことなどを把握し、得意なことは伸ばしていけるようにしている。苦手なことは、少しずつ取り入れていけるように工夫している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナウイルス流行により、交流がなくなっている。少しずつ交流が戻ってくると思うので、感染症に配慮しながら、交流ができるように声掛けを行っている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に、面会をさせていただいている。入院中で、面会ができない場合は、担当の方に、退院後の意向を聞き取りさせていただくこともある。また、家族からこれまでの生活歴や性格、現在の様子などを詳しく聞き取ることで、困っていることや要望などが見えてくる。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に関する問い合わせの時点から、これまでの様子や悩みなどを拾い上げるようにしている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族とじっくり話をするようにしている。入居希望で話をすすめてきていたが、リハビリ希望や料金面での負担など、グループホームでの対応が難しい場合、他のサービスをすすめたこともある。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	生活の中でできることはしていただくように意識している。入居者より励まされている職員も多い。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日頃の様子をこまめに報告するようになっている。みてもらえるだけで充分です、など言われることが多いため、これについてどう思いますか？など具体的な内容を聞くようになっている。職員が対応できないことなどは相談して、協力を得ている。		

R5.3自己・外部評価票(グループホーム春の山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族構成以外に、聞き取りができる範囲で関係者を確認している。面会は、問題なければ、家族以外にも来ていただけるようにしている。	家族との窓越し面会を実施しているが、家族だけではなく、信仰している信者の方が面会に来られたりしている。家族から事業所に電話があった際は、利用者に電話を取り次いで話が出来るようにしたり、年賀状のやり取りをしている利用者もいる。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	席の配慮や、会話ができるように間にはいたり、入居者同士にまかせたりと、その場の様子で臨機応変に対応している。挨拶をかわしたり、衣類を整えたり、自然に入居者同士の関係ができています。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も連絡をすることが多い。家族から経過の連絡を受けることもある。入居者の配偶者も高齢であるため気にかけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメントは、日ごろ関わりが多い介護職員(担当職員)が作成している。聞き取りが困難な場合は、日頃の表情やこれまでの生活歴、性格などから考えている。	利用者1人1人に居室担当職員がいるため、その職員が聞き取りをしている。他にも日頃の利用者本人の言動を拾い上げている。ラーメンが好きな利用者がいたため以前は外食していたが、今はコロナウイルス感染症予防の観点から行けてはいない。しかし、月1回献立に入れる等、利用者の意向を少しでも取り込むようにしている。花が好きな利用者が花を観れるように、居室の外窓から花が見える位置に花を植えている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前、入居時に詳しく聞き取りをしている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	出勤したらすぐに両ユニットの申し送り簿や個人記録を確認するようにしている。また、ミーティングで両ユニットの様子を報告しあい、知らなかったということがないようにしている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	入居者本人と、家族のことは、介護職員(入居者担当)がよく把握できている。色々課題はあるが、今一番必要なことを話し合うようにしている。	アセスメントは担当職員と計画作成担当者が同時に実施し、ケアプラン作成は計画作成担当者が利用者全員分を作成している。サービス担当者会議は、コロナウイルス感染症予防の観点から、家族、医師、薬局など来て頂いてからの会議の実施ができておらず、利用者家族には電話で意向確認をし、医師には診察時に聴く様になっている。モニタリングは居室担当が実施して、取りまとめは計画作成担当者が実施している。	サービス担当者会議録の中に、診察時の医師からの指示内容や、その他医療的な内容についても記載をしてはどうだろうか。

R5.3自己・外部評価票(グループホーム春の山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録は詳細に残している。入居者担当や計画作成担当者が記録を振り返りながら、今後に活かしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	決められたことをそのまま実行するのではなく、生活が楽しく、穏やかに送れるように、柔軟に考えるようにしている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ひとりひとりの生活歴などを把握しており、入居後も何かしら役割や楽しみが持てるようにしている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医は指定していない。現病歴や通院の距離、急変時の対応などを考慮して、こちらから提案することもある。かかりつけ医から直接説明してもらい、今後を検討することもある。	医師は、事業所の協力医に指定はしていないものの、入居後は連携の図りやすさや夜間対応が可能であるようなことを考えて、事業所の協力医に診てもらうことが多いのが実情である。他科受診は基本的には家族対応にしている。身体的な面で通院介助が難しい場合は、介護タクシーを利用して頂いている利用者もいる。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員が日頃の様子をよく把握できているため、なんとなく様子が違うという時でも、ためらわずに相談している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院となったときに、家族や病院の担当者と話し合いをしている。入院中、病院の担当者と経過を見ながら、退院時期や今後について話し合いをしている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や、終末期について指針を整備している。入居日に説明や、その時の意向を確認している。その後は、体調変化時やケアプラン更新時に意向にかわりがないか確認をしている。指針の内容を説明しても、重度化すること、看取り介護がどういふことが想像しにくいので、事例などを用いて説明するようにしている。	看取り介護を実施しており、今年度は2、3名の看取り介護を実施している。「重度化した場合の対応に係る指針」「看取りに関する指針」「看取りについての同意書」を作成して、看取り介護に対して積極的に対応している。また、看取り介護後のアンケートを職員に書いてもらい、看取りについての振り返りや、今後の課題について話し合う機会を持っている。	看取りに関しては、看取り介護後に職員にアンケートをとる事により、良かった点や改善点等を振り返ったり検討したりする機会がある。今後も継続してはどうだろうか。

R5.3自己・外部評価票(グループホーム春の山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	勉強会に取り入れている。長く勤めている職員は、経験が少ない職員に指導している。指導することで、再認識できている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回の避難訓練を実施している。地震や水害を想定した訓練も行っている。	年2回、避難訓練を実施しており、内1回は夜間想定訓練を実施している。屋外に出る訓練を中心に実施している。消防署の立ち合いは毎回依頼をして、参加してもらっている。消防署からは講評を頂いており、避難完了した居室については誰でも分かるように工夫をしている。運営推進会議の構成員の方々には、避難時の協力は呼びかけている。水消火器の訓練を実施している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室に入るときは、必ずノックをして、ひと呼吸おいてドアを開けるようにしている。また、不在時には入らないようにし、入るときは目的を伝えて了解を得ている。 排泄や入浴介助時でも、周囲から見えない様にドアを閉めるようにしている。	居室は利用者の空間であるので、職員であっても勝手に立ち入らないように、入室時にはノックをして入るようにしている。利用者が居室にいない時は、利用者に了承を得て入室するようにしている。女性利用者で男性から排泄介護や入浴介護を嫌がられる方は、極力、同性介助で対応出来るようにしている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ひとりひとりの理解力や判断力にあわせて対応をかえている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活のリズムが乱れないためにも、食事時間は決めており、それに合わせて朝の起床時間も2時間くらいで全員がそろう。就寝時間はそれぞれ。おおまかに1日の流れがあり、その中で、部屋で過ごす方、身体を動かす方など、ひとりひとりの過ごし方がある。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴準備は本人にまかせている。できない方は、一緒に準備したり、好みを選んだりする。家族が好みの物を持ってこられることもある。訪問美容では、ヘアカラーを希望される方もおられる。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	小鉢のつぎわけなど手伝っていただいたり、メニューを説明して関心を持ってもらったりしている。片づけは、食器洗い、お盆拭きなどできる方がたくさんおられる。 朝食で人気のクロワッサンはおかわりもできる。	6か月位までは3食手作りで食事を提供していたが、コロナウイルス感染症が事業所で発生して以降は、昼食と夕食はチルド食を注文して温めて提供をしている。朝食は職員が手作りで提供している。3月から週1回は手作りの食事を提供する予定としている。敬老会、誕生日会等の行事の際は、手作りの食事を提供している。パン食を好む利用者はパンを提供したり、月3回のクロワッサン提供の朝食日は、クロワッサンのおかわりが出来るようにしている。	

R5.3自己・外部評価票(グループホーム春の山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	薄味、塩分控えめを基本としているが、おいしいと思える味付けを大切にしている。食欲がない方は、バランスよりも好物を提供して、摂取量を増やす工夫を優先している。水分は、声の掛け方、提供回数などひとりひとり対応を変えている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	基本的に毎食後口腔ケアを実施している。できることを見極めて、仕上げ介助をしたり、全面的に介助をしたり工夫している。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	トイレでの排泄を基本としている。入居前はオムツ使用が当たり前だったが、トイレでの排泄が可能となり、綿パンツに変更となったということもあった。機能低下し、逆のパターンもある。基本がある中で、その方の状態で判断している。	トイレでの排泄を基本としているため、オムツを使用していた利用者が布パンツに変更になった利用者もいる。ポータブルトイレを使用している利用者もいる。利用者のカルテに排泄チェック表があるので記録をしている。排泄チェック表を記入する事で、放尿や失禁が増えているが、排尿の量や回数をチェックして排泄の声掛けをする事で、布パンツに移行した利用者もいる。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日排便がある方は少なく、緩下剤を服用している。食事の時は緑茶を提供しているが、それ以外で、ポカリスエットや起床時の白湯など工夫している。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週3回計画している。順番は希望を優先。タイミングをのがすと入らない方や血圧の変動が激しい方など考慮して順番を決めている。失禁にあわせて入浴日を変更することもある。	週3回入浴を提供している。利用者の中には、好みのシャンプーや洗顔フォーム等を使用している利用者もあり、本人が好むように対応している。女性利用者で男性職員からの入浴介助を嫌がられる場合は、女性職員で対応するように配慮している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居前の生活習慣では、体調に悪影響だと感じる場合は、少しずつリズムを整えるようにしている。朝は、カーテンを開けて陽を浴びてもらい、夕方以降はだんだんと心地よく眠れるように、声のトーンを落とし、照明を暗くしていく。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情報に必ず目を通すようにしている。薬局管理がほとんどであり、連携がとれている。薬拒否がある方について、色々な方法を考えてもらっている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家族との手紙や電話でのやりとりは大変喜ばれる。人をまとめる仕事をされていた方には、号令をかけていただいたり、歌が好きでステージにあがっておられた方には、行事に歌っていただいたりしている。カラオケはみなさんに好評。		

R5.3自己・外部評価票(グループホーム春の山)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	ひとりひとり、その日の希望を叶えることは難しい。感染症が流行り、外出を中止しているため、自由な外出ができない状況。今後は、暖かくなってきたら、ドライブを再開したい。	コロナウイルス感染症予防の観点から、外出は出来ていないが、近隣にドライブに行ったり、桜を観に行ったりしている。中庭で体操をしたり、お茶を飲んでもらったり洗濯物を干したりして、敷地内ではあるが、少しでも外出が出来るように工夫している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には、お金や印鑑など重要なものは、所持しないとしている。持っていると安心するからと、少額を所持されている方もおられる。お小遣いを一人ずつ、金庫で管理しており、可能な方は、外出時、職員の付き添いのもと、支払いをしていただくこともある。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族から手紙が届くことがある。希望があれば電話もかけている。家族から電話がかかることもあり、つないでいる。希望がなくても、心配事などがあれば、こちらから電話をすすめている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	中庭には、もみじやつつじ、紫陽花があり、ガーデニングが得意な職員が世話をしている。そこに入居者が加わり一緒に世話をする姿が見られる。夜間使用する電気は温かみのある黄色を使用。南側は道路沿いで交通量も多いが、中からはそれが感じられないくらい静か。	2ユニットでトイレが9か所と多く、利用者がトイレを使用中に他の利用者が排泄したくなった時でも待つことなく排泄が出来る。他にもテレビやDVDがあり、好きなテレビやDVDを観ることが出来る。また畳の小上がりがあり、ゆっくりと寛げる空間もある。中庭にはどちらのユニットからも気軽に行くことが出来る。気候が良い時は、日向ぼっこやお茶を楽しむことも出来る造りとなっている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事時間は、全員一緒としているが、それ以外は、居室で編み物をしたり、テレビを見たり、自由に過ごす時間がある。一緒に、カラオケを楽しんだり、廊下を歩いたり、他者と関わる時間もある。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	タンスやソファ、仏壇などを持ち込まれることも多い。入居前に、新しく準備せず、できるだけ使い慣れた物を持ってきていただくように伝えている。入居後は、状態にあわせて工夫したり、変更したりすることもある。アルバムを持ってきていただき、一緒にみながら懐かしんだり、これまでの様子を知るきっかけになったりしている。	事業所の設備として、電灯、ベッド、カーテン、エアコンが備え付けてある。また、利用者によっては、仏壇や筆筒、ソファ、テーブル、椅子、家族写真、アルバム等を居室内に持ち込んで、今までの暮らしぶりを少しでも継続できるようにしている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	席が変わるだけでも混乱される方が多い。できるだけ環境を変えないようにしている。ひとりひとりの動きや理解力などを把握して、環境整備に努めている。ホーム内に何ヶ所もトイレがあるが、行きやすく、わかりやすいトイレに案内している。毎食前に、日付けや天気などの確認を行っているが、廊下を歩いても確認できるように、日めくりカレンダーを貼り出したり、トイレの案内を貼り出したりしている。危険な洗剤や薬が保管されている場所は施錠している。		